令和6年度　小平市立小平第十三小学校　学校評価報告書

学校教育目標　21世紀をたくましく生きる子どもたちを育てることを目指し、以下の教育目標を設定する。
◎自ら考え行動する子ども（重点目標）・仲良く助け合う子ども ・明るく元気な子ども

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　子どもたちのみならず、教職員・保護者・地域が、「自ら学び、かかわり、他と共に」を共有しながら、自己の向上を図り、共に育てる拠点としての学校。
【目指す児童・生徒像】 自ら学び、かかわり、他と共に生きる子ども
【目指す教員像】　自ら考え行動し、常に研鑽を積み、自己の向上を求め続ける教職員

前年度までの学校経営上の成果と課題

【成果】学習ボランティアの増員、習熟度別算数の授業の再開、学習者用端末の効果的な活用により、基礎学力の向上につながった。
【課題】生活のきまり「スマイル13」を児童だけでなく、保護者会や学級のクラスルーム等、様々な方法で家庭へも周知を図っているが、あいさつや廊下歩行等で改善が必要である。

	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
学力向上	①授業規律の確立 ②児童が相互に学び合い高め合う授業の日常的な実践 ③学習者用端末を中心としたICT教育機器の活用と研修の充実 ④授業アンケートの実施 ①学習補助員や地域人材の活用と個別指導 ②東京ベーシック・ドリルや学習アプリの活用 ③習熟度別によるきめ細かい算数科の指導 ④家庭学習の実施と充実（低学年30分　上学年10分×学年）	3	3	年度当初に、授業規律やホワイトボードの活用について周知したことで、浸透している。ペアやグループでの話し合い活動を授業の中で取り入れることで、児童同士の意見の交流が活発に行われた。 資料の提示、児童の考えの共有など、様々な場面で学年の実態に応じて学習者用端末を活用できている。 授業や朝学習の時間、学年によっては家庭学習で東京ベーシックドリルや学習アプリ活用し、計算問題に取り組んでいる。診断シートを2年生以上の学年で学期ごとに実施し、学力の定着度を把握し、算数の授業改善に生かしている。	3	4	教員は児童に場面に応じ指示を与え、授業規律の確立に努めている。 様々な場面でタブレット端末を活用し、児童同士の意見交換やグループの話合いを通して、お互いの考えを共有したり、新しい発見したりする姿が見られる。 校内研究を参観し、授業改善に取り組んでいることが分かる。教員の努力や地域の協力によって、学力向上の成果も出ている。 習熟度に応じた算数指導が実施され、定期的なコースの見直しもあり、公平性に配慮されている。	スマイルドリルやロイロノートの活用など、学習者用端末を意識的に学習に取り入れることで、学習成果につなげることができた。 習熟度別の算数の授業では、東京ベーシックドリル診断テストをもとに授業改善を行い、授業実践に生かすことができた。 ペアやグループでの話合い活動について、学年または学校全体で取組の情報交換をできるとより良い。 「はい・立つ・です」の掲示や児童への言葉掛けにより、授業規律は概ね守られているが、チャイム着席や発表者の偏りが課題となっている。
健全育成（いじめ防止）	①ふれあいアンケートの実施と分析 ②いじめ防止にかかわる道徳授業の実施（年3回以上） ③特別活動を中心としたよりよい人間関係形成を重視した活動の充実 ④いじめ防止校内委員会の充実 ⑤生活のきまりの活用 ⑥あいさつ運動の実施 ⑦サポート会議の活用 ⑧委員会・クラブ・たてわり班活動の充実 ⑨全教員が週1回以上の学校ホームページ更新	3	4	ふれあい月間のアンケートの結果から課題を把握し、学校全体でいじめ防止に取り組んできた。細かい事案にも早期対応、解決が図られている。 学期始めや保護者会の際に「生活のきまり」を児童・保護者と確認し、校内での過ごし方や持ち物の共通認識を図ってきたことで、児童は落ち着いて生活できている。 遠足やクラブ活動、たてわり班活動では、様々なパターンで異学年での交流を行い、他者意識や高学年としての意識の向上につながっている。 週に1～2回以上学年のホームページを更新し、学校の様子を発信している。	3	4	アンケートの実施や生活のきまりの周知により、いじめの抑止力になっている。いじめ防止には、登下校場面、放課後・週末における動向の把握も肝要であり、関係諸機関との連携のもと迅速な対応を期待する。 教員が子どもたち一人一人の評価点を見付けようとしていることに共感する。 たてわり班活動や委員会活動による異学年交流を通して、子ども同士の協力性を育てることにつながっている。	年度当初や必要に応じて生活指導連絡会等で、生活のきまりを再確認することで、生活態度や持ち物等の共通認識が図れた。 生活指導における問題への対応として、各学級だけでなく、全校朝会時での呼びかけや生活指導主任による給食指導の見回り等を実施した。 たてわり班活動の以外にも、十三小フェスティバルや遠足等、異学年での交流が増え、より良い人間関係の形成につながった。
特別支援教育	①特別支援教室の効果的運営□ ②特別支援巡回指導の活用□ ③個別指導計画の作成と活用□ ④特別支援校内委員会の効率的な運営□ ⑤こげら支援シートの活用□ ⑥児童一人一人の正確な見取り□ ⑦「こだいらこれだけは」に基づく環境の整備（ホワイトボードの活用、教室前面の掲示板等）□	3	4	巡回指導教員の授業観察の際に、通級児童のみだけでなく、気になる児童も多く見てもらい、必要に応じて個別指導計画を作成し、学校全体で情報を共有できるようにした。一人一人への組織的な対応を今後も継続する。 特別支援校内委員会を実施し、話し合いの内容を生活指導連絡会で報告することで、支援が必要な児童の情報の共有を図っている。 学期中や夏季休業中に、特別支援教育に関する研修を実施し、教員の理解を深めた。	3	4	特別支援教室の効果的運営が実現しており、巡回指導教員の指導も活用されている。 展覧会では、特別支援学校との共同制作を実施し、積極的に特別支援教育をされていると感じた。また、企業での展示や職業訓練校への協力を仰ぐなど、地域とのつながりを大切にし、子どもへの社会教育を実施している。ユニバーサルデザインの考え方に基づく教室環境の整備について、充実を図っていってほしい。	児童理解研修や連絡会により、支援が必要な児童の情報共有がされ、授業や補教際に支援につなげることができた。また、巡回指導教員からの指導（教員へのフィードバック）を、日々の教育活動に生かすことができた。 特別支援校内委員会は昨年度より多い回数で行い、定期ではなく必要に応じて実施できた。 ホワイトボードの活用により、児童が授業への見通しをもつことができた。
体力の向上	①休み時間の校庭での活動計画 ②なわとびやマラソンの実施と取組強化 ③裸足の運動会の実施に向けた取組の充実 ④体力テストの結果を基にした体育の指導の工夫 ①様々な感染症への理解と予防の徹底 ②「早起き、早寝、朝ご飯」の啓発活動 ③基本的な生活習慣の確立 ④栄養士と学級担任による食育の授業	3	3	休み時間に校庭に出ることを呼びかけるだけでなく、教員も積極的に児童と遊んだり、計画的に学級レクを実施したりした。 2学期以降、なわとび月間やマラソン月間を実施し、児童の体力向上を図っていく。 全校共通の給食指導や、栄養士との食育授業、出前授業などを通して、食の大切さを指導し、児童の食に対する意識が上がっている。	3	4	なわとび月間やマラソン月間が、コロナ禍で落ちた子どもたちの体力向上に役立っている。 食育指導については、栄養士による指導、給食だよりや校内の掲示物、ランチルーム給食など、児童の食に対する理解や関心の向上につながっている。テレビゲームやSNSの利用が広がる中、運動することの楽しさが、中高学年にもつながるような指導を期待する。	なわとび月間では、学級での大縄だけでなく、体育委員会の取組として、個人での短縄にも取り組むことができ、体力向上と学級の集団意識の向上につながった。 3学期にマラソン月間を実施し、さらなる体力向上を目指す。 養護教諭の保健指導、栄養士による食育授業が計画的に実施することができ、学校全体の健康や食への関心の高まりにつながった。また、学童農園と家庭科の授業を関連させて味噌汁作りを行い、食材や食に関わる人への感謝の気持ちをもつことができた。
ライフ・ワーク・バランス	①C4thの積極的な活用 ②月2回の定時退勤日の設定 ③教員の年次有給休暇の15日取得 ④教員の残業時間月平均55時間以内 ⑤管理職の積極的な休暇取得 ⑥副校長補佐の計画的・積極的な活用 ⑦スクール・サポート・スタッフの計画的・積極的な活用 ⑧働き方改革に向けた、教員自らの目標設定と実践。	3	3	C4thやクラスルームを積極的に活用したことで、印刷時間の減少や情報の共有化、連絡会の時間の短縮につながった。 学期内の会議の内容の精選・削減により、教職員が積極的に年次有給休暇を取ることができた。今後はできるかぎり定時退勤日を増やしていきたい。 スクール・サポート・スタッフやエデュケーションアシスタントを計画的に活用することで、ゆとりをもって教材研究や校務分掌に取り組むことができている。	3	4	会議や資料作りを削減しながら、教員本来の教材研究や授業準備に充てる時間を確保している様子が伺える。C4thやGoogleクラスルームの活用により、ペーパーレス化が格段に進み、オンライン時代に対応した情報共有が実現している。ただし、オンライン化が必ずしも教員の負担削減につながっていない点も注視する必要がある。	児童への連絡や保護者への通知文等、様々な場面でクラスルームを活用し、時間の短縮とペーパーレス化につながった。C4thの積極的な活用により、会議時間の短縮につながった。ただし、場合によってはしっかりと情報の理解と共有が必要なものがあるため、会議での説明も必要である。スクール・サポート・スタッフの活用の作業内容を増やし、教員の教材研究や授業の準備の時間の確保、定時退勤につなげていきたい。 管理職を含め、教職員全体として休暇が取りやすい職場環境になっているが、個人の仕事量の差や家庭環境の状況が異なるため、残業時間の差が大きい。